



実践 ①

教科書 + 講談「扇的」・「ビギナーズ・クラシックス」

登場人物に焦点を当てて 名場面集を作る

埼玉大学教育学部附属中学校教諭

碓氷愛実



「古典に親しむ」ことができるように、授業では扱う作品の特徴を生かした学習活動を設定するよう心がけています。「平家物語」の特徴として、人間の情動が生き生きと描かれている点があります。そのため今回は、登場人物に焦点を当てることで、作品に対する考えを深めることを目標にし



パソコンで名場面集を作成する様子

ました。あわせて、名場面集を作る活動を設定し、生徒が自ら作品を読み込んだり、登場人物に注目したりできるようにしました。

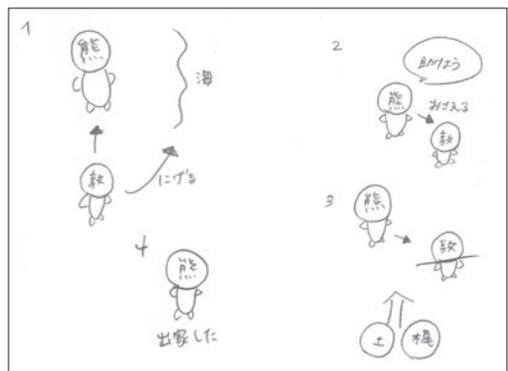
● 一時間目

「平家物語」の概要を学んだ後、冒頭部分の暗唱と、「扇的」原文の音読を行いました。授業の最後には、六代目神田伯山の講談「扇的」(YouTube)を鑑賞しました。迫力ある名人芸に触れさせることで、作品に対する興味を高めることができました。

● 二〜四時間目

「ビギナーズ・クラシックス 平家物語」(KADOKAWA)とワークシートを配付し、名場面集作りを進めます。

なかには、インターネット検索を駆使して史実や他の文献とも比較し、登場人物の人間性に迫ろうとする生徒や、図を描いて場面を整理する生徒の姿もありました。



「敦盛の最期」の場面を整理した図

ある生徒は、「木曾の最期」を名場面に取り上げ、「義仲の討ち死にを知り、戦う意味がないと言って兼平は自害したが、彼の命はいつた何のためにあったのかと考えてしまう。」と記述していました。

● 五時間目

完成した名場面集の交流会を行いました。先述の生徒は、他の生徒から「敦盛の最期」を紹介され、「兼平も武士の生き様をはかなんでいたが、直実も同じである。武士として生きるのにも葛藤があるのだ。」と振り返っていました。

このように、生徒たちは登場人物の言動を読み取り、自分なりに解釈することで、彼らの生き様に共感したり、疑問を抱いたりするなど、古典の世界に浸っていました。

実践 ②

教科書 + 群読・絵巻物・新聞・「おくのほそ道」との関連

学習者とともに創造する 古典の授業

前大阪市立昭和中学校教諭

植田恭子



「平家物語」の魅力と価値を、言語活動を通して見だし、古典を学ぶ楽しさを実感できる授業アイデアを提案します。

① 音で創り上げる「平家物語」

漢語を多く用いた和漢混交文の「平家物語」は、琵琶法師の語りによって広められました。独特の調子とリズムをどのように表現するのかをグループで考え、オリジナルの台本を作成します。その際、教科書にある二次元コードを読み取って、朗読の参考にさせるとよいでしょう。群読はタブレット端末に録音して、練習することもできます。最後に、群読発表会を開き、相互評価を行います。

作品の特徴を生かして群読することで、古典の世界に親しむことができますし、協力して取り組むことは、協働的な学びにつながります。

② みんなで創る「デジタル絵巻物」

「平家物語」を題材にした絵巻は、鎌倉時代末期に作られ、その後も一の谷や屋島の戦いを描いた作品が多く生まれました。タブレット端末を使って、「デジタル絵巻物」を作成してはどうでしょう。

ウェブで「平家物語絵巻」と検索すると、多くの情報が得られます。「平家物語画帖」(教科書二年152ページ)を参考にし、「扇的」の場面を描きます。さらに、筆ペンを使って、原文(「与一、かぶらを……海へさつとぞ散つたりける。」)を丁寧に書き写します。完成した作品は、タブレット端末のカメラ機能を使って、写真データにしておきます。ロイノートを使えば、写真データに朗読などの音声を入力することも可能です。最後にクラス全員のシートをつないだら、「デジタル絵巻物」の完成です。

③ かわら版「平家物語」

琵琶法師の平曲によって、広く民衆に親しまれた「平家物語」ですが、その当時、新聞というメディアがあったとしたら、どのようなものが発刊されていたでしょう。グループで協働して作成してはどうでしょう。

トップ記事、インタビュー、社説、コラム、四コマ漫画、広告、源氏・平家双方の声など、記事の内容を考えて配置します。この活動は、多面的、多角的なものの見方を養うことや情報活用能力の育成にもつながります。

④ 松尾芭蕉が詠む「平家物語」

三年生で学習する「おくのほそ道」と関連させた授業になります。「平泉」では源義経を、「小松」では斎藤実盛をしのぶなど、松尾芭蕉が「おくのほそ道」の旅で、「平家物語」ゆかりの地を訪れていることを紹介します。簡単なエピソードと、実際に芭蕉が詠んだ句を伝えるとよいでしょう。

「扇的」や「敦盛の最期」で、芭蕉はどのような句を作ったかを想像し、五・七・五の十七音で表現します。創作した句を読み合い、合評します。

